



昭和45年(1970年)

8月号(No. 302)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文	
エベレスト隊帰国ご挨拶	1
第一回現地支部長会議	1
冠松次郎氏逝去	1
石黒さんの碑の除幕式	2
オランダ隊々長から	2
屋久杉の保護決まる	3
第13回有志閑談会	3
第24回ウェストン祭	4
オスカー・ハウストン	6
行方沼東さん逝く	7
今西錦司博士飯豊に登る	7
ブータンから帰国	7
山岳編集覚書	8

会員通信	
南部の低い山二つ	古沢 肇 4
ニューヨークとロンド	
ン	望月達夫 5

図書紹介	
山の素描第一集	松崎中正 8

図書室便り	
図書受入報告	9
洋書受入報告	9
定期刊行物受入報告	9

会務報告	
7月理事評議員会	9
新入会員	10
婦人懇談会集報告	10
ルーム日誌	11
会員異動	11
エベレスト隊帰国歓迎会	11

私も日本山岳会エベレスト登山隊一行三十六名は、チョタレ、ビンジュの二名のシェルパを同行して、六月二十日午後十時四十五分羽田着の日航機で無事に帰国いたしました。当日は飛行機が遅延し、深夜にいたり、出迎いの皆様には大変ご迷惑をおかけいたしましたことをお詫び申しあげます。

なお、現地クムジュンにて気象観測を続行中の井上隊員は、八月下旬に帰国の予定です。

エベレスト隊帰国ご挨拶

すでにご

承知のとおり、東南稜から五月十一、十二日の二度、登頂に成功し、その目的の一部を果たして来ました。が、何と云っても、成田隊員が欠け、全員揃って帰国出来ないう次第となりました。これも痛恨の極みであります。

また南壁ルートはコンディションが悪い上に、極めて危険な状態となりましたので、断念し、宿題として残りました。

各人各様の体験を得たことと思ひますが、私にとっては、まことに貴重な体験で、人生の上でも二度ないチャンスに恵まれたよい勉強をいたしました。山に憑かれた人間としては、この上ない果報のことだと、つくづく幸運なめぐりあわせを感謝しております。

八千m以上の経験者が、一挙に十数名増えたわけでありまして、貴重な体験を今後に行きたいと念じております。

会員諸賢は、各界から暖いご支援を得まして、おかげさまで、登山の実施にも不都合なく、募金も目標額に達したこともうかがい、まことに有難く感謝いたしております。

まさに、巨峯エベレストは、その持つ大きさと同じぐらいの協力、後援者の肩の一つ一つによって、その頂きは踏まれたことになりました。これは誤りない実感でした。

簡単ながら帰国のご報告に代える次第であります。(大塚博美)

第一回現地支部長会議と
日本山岳志出版記念会

日本山岳志刊行出版記念会をかねて第一回現地支部長会議が六月二十八、九、十日の三日間弥彦山と佐渡で行なわれた。東京からは吉沢副会長と山崎常務理事が出席する予定のところ、二十八日出発直前吉沢副会長が急病のため参加出来なくなつたのは、まことに残念であつたが、宮城、山形、静岡、東海、信濃、関西の支部が参加、越後支部の尽力で楽しい集りを開くことが出来た。

弥彦山は日本海側に立派なドライプウェイが山頂まで通じている。全員マイク robes で登り、高頭翁のリリーマ前、出来上ったばかりの日本山岳志刊行版をささげ、孫の高頭寿久氏、藤島越後支部長、出版社の馬場社長などからそれぞれあいさつがあつた。祝杯をあげた後再びマイク robes で新潟に戻り、午後佐渡汽船着所から乗船し、両津港では地元両津の助役さんから歓迎の言葉と花束を贈られた。支部長会議の会場はドンデン山の大佐渡ロッジの大広間。午後七時から支部長会議にはいり、各支部の現状の報告と希望など懇談会の形で話を進め、次のような話が出た。

・十二月の年次晩餐会は十二月五日(土)にしたい。

・エベレスト登山の報告会を各支部で開くよう本部は積極的に働きかけてもらいたい。

・信濃支部は明年ウェストン祭が二十五周年になるので盛大にやりたい。

・エベレストの装備を各支部にわけてもらえないか。

なお、明年の現地支部長会議は宮城支部担当と決まった。

翌二十九日は午前七時大佐渡ロッジを出発、ドンデン池から、あねばごえ、笠峰、石花越、カレ川、夫婦池城ヶ平と佐渡の山をのんびり歩いた。佐渡の山は静かなことが第一、それにきれいな芝生の稜線もすばらしく、のどかに牛が放牧されている。石花登山口からまたマイク robes で平根崎で下車、天然記念物の波蝕欧穴群を見物、さらに尖閣湾の奇岩を遊覧船でながめながら、尖閣荘前で二班に分れ、A班は相川、両津から新潟へ。B班は尖閣

荘で泊り、翌三十日佐渡金山遺跡、佐渡博物館などを見学、新潟に戻り解散した。

越後支部をはじめ、それぞれ地元の方々にたいへんお世話になったことをあらためてお礼申し上げる。(山崎)

参加者(越後支部) 藤島玄、望月力、斎藤平七、上村幹雄、曾山志計雄、佐藤一、井口正男、原始(佐渡山岳会) 村川径一郎、高橋照男、山口寿証、武田輝雄、志和良一、飯山弘(野島出版) 馬場由太郎(石川支部) 小林雄次郎、真田富孝、増江俊三、小島三郎(宮城支部) 伊達篤郎(東京) 山崎安治、松本熊次郎、諸岡一、網倉志朗(静岡支部) 萩野恭一、石間信夫(東海支部) 熊沢正夫(信濃支部) 井口謙司、蒲生明澄(関西支部) 今西寿雄、麻野俊助(山形支部) 斎藤清吉。

小集会予定のお知らせ

小集会の下半期の予定は次のように決まりました。お忘れなくルームへ御参集下さい。(時間は午後六時です)

▽九月九日 マカール隊報告、東海支部

▽九月三十日 エベレスト隊報告

▽十月三日 現地小集会(場所は未定)

▽十月十四日 早大ツクチエ、慶大バウダ峰遠征報告

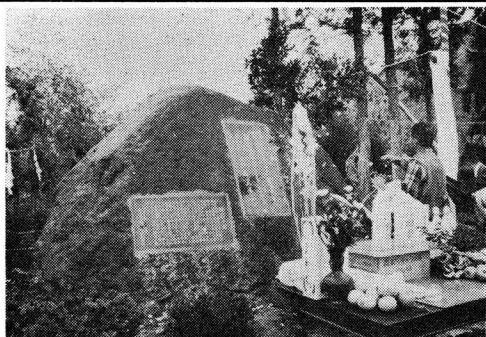
▽十一月十八日 ベルーの地震にあつて、京都山岳会

冠松次郎氏逝去

本会名誉会員冠松次郎氏は七月二十八日老衰のため北沢岸町の自宅で逝去された。八十八歳。氏は明治十二年二月東京生まれ、明治四十二年十二月日本山岳会入会、会員番号二二七、昭和二十八年六月名誉会員。八月二日、日暮里養福寺で告別式が行なわれた。

石黒さんの碑の除幕式……に参列して……

吉沢 一郎



石黒さんの顕彰碑

剣岳の正面は石黒さんに言わせれば西面即ち富山市に面した方になる。何十年もの間その剣岳を愛し心を惹かれ朝な夕なこれを眺め、そして自らも遠くからは逆落しに見える池ノ谷に登路を開拓し、而もその事実が広く世間には知られなかったということ。日本の将来を若い登山家の双肩に托した石黒さん。古武士のような風格を具え、思

うことはズバズバ口に出し、或いは書いて、ケロリとしていた石黒さん。日本山岳会への入会が大正七年（一九一八年）で会員番号が六一三番と言

いて私のわきに座られた。

石黒さんについて何かこれ以上クドクドと書くのはやめておく。それは富山の人が書くのが一番妥当であり、現に橋本広氏が一九六七年度の「山岳」に悉く余すところなく書いておられるので、私にはそれ以上加わる余地がない。石黒さんとの私的やりとりについては「山」二六六号にあるので読んで頂きたい。尚、石黒さんについて

の詳細は、石黒清蔵顕彰碑建設委員会が編集した「剣岳に生きる——石黒清蔵の遺稿と追憶」という小冊子（山岳会の図書室にも寄贈されている）を御覧になればよくわかると思う。

それにしてもあの頑固なわが倭親父を自由に山に行かせた奥さんのせきさんも偉いと思う。新宿の駅の外で、石黒さんが腰に手拭い

をぶら下げ、きたないリュックサックを担ぎ登山靴をはき胸を張って歩いて行く

あとから、あのしとやかな奥さんがいそいそと少しばかり小走りについて行かれる姿を、ある人がみたと私に教えてくれた。



碑前から見た剣、鶴ヶ御前、奥大日、大日岳、前の川は早月川

た。皆義理だけで参列した人ではなかった。この日は雨のため剣岳は見えなかったが翌日馬場島山荘からの帰途にはす

た。つづく。義理に足る奥さんである。

石黒さんの顕彰碑は蓬沢と伊折の間の早月川の右岸に出来た。畑の隅の川岸だから登山道からは全然わからない。五月十七日（日）の早朝は曇っていたが、上市から、バスで現場へ向

ついていた。相憎雨となってしまう。それでも委員会の人達の手際のいい設営で式は順序よく進んでお昼頃には無事終了した。富山県の人が多いのは当然だが、大阪からは角口さん、新潟からは藤島さんと斎藤さんが来られ

つかり晴れ上って、石黒さんが毎日見ている剣岳の正面のみならず、南北へ延びた翼が新雪に薄く被われて美しい姿をすっかり見せてくれた。折角来たわれわれに対する石黒さんの配慮によるものと思う。

式後伊折の小学校で記念の祝宴が開かれたが、中田勇吉さんの挨拶もよかった。橋本さんが、剣岳の正面にルートを開いたのは池ノ谷の石黒さん。早月尾根の冠さん、そしてここにおられる東大谷の吉沢一郎さんであります、と言われた時には、へえそんなことになるのかいなと思わず顔を赤くしてしま

った。そう言えば丁度四〇年前にこの辺をトボトボと歩き、馬場島の丸田丈太郎の掘立小屋から立山川を遡ってから、面白そうな谷だからこれを登って剣岳へ行ってみようということになり、左

保から早月尾根に出て目的を達した。これが東大谷からの初登攀とはあとになつて知ったのだから人気なものである。その時、右保の頭にあった大きな岩を「蟹の鉄」と仮称したが、それがいつの間にか通称になってしま

った。夜は富山や魚津の人達の配慮で馬場島荘に泊ることが出来た。岳連の若い人達や日本山岳会の富山支部の人達、そして今年ヒンズー・クシニへ行く有本さんをはじめとする女性達と一緒に

おそくまで歓談した。私はこれらの人々の話をきいてとてもためになったと思った。JACというものは飽くまでもクラブであるということ忘れてはならないと思う。

毛布に入ってから少し寒くてねられなかったが、それでも翌日は六時頃まで横になっていた。誰かが「剣が見えますよ」と言ったので写真機をぶるさげて外へ出てみた。

早月尾根の大半は眼の前の松尾平が近過ぎて見えないが、右は鶴ヶ御前、左は小窓、大窓を経て赤谷山までが並んでいる。野島さん、角口さんと歩く。朝食を済ませてから橋本さんや魚津の佐伯君兄弟、新潟の斎藤さんと白萩川の方へ散歩に行く。河原の遭難碑が殆んど流されてしまっているという。片道一キロばかりを陽光を浴びながらのんびりと散歩する。公害の充満しているという東京よりは気持ちがいい。

午後車で富山に出、石黒さんの家に挨拶し、佐伯君の店のそばの料理屋で土地の珍味をいろいろ馳走になってからお別れとなる。

夜行での見送りは全部お断わりしたが、H・Kへ行く有本嬢と石黒さんの息子さんとが来て下さった。

◇オランダ隊長から◇

五月一日付でノールディック隊長から手紙が来た。とても冒険的な旅をやつて来ました。プリ・ガンダキの上流は近く登山隊が入れなくなるかも知れませんが、わが隊はリダンダ谷へさえも入れませんでした。政府の許可だけではとても駄目。ナムルの警官もなだめられませんでした。

われわれは貴殿から送られた地図の六五〇峰に登るためチューリン谷へ入りました。慶応隊のBCの近くにわれわれもBC。板谷さんが遭難しましたので医療的援助とシェルパを貸しました。もう登山を止めたかと思つたら五月二日にパウダー峰に登つたことを聞いて驚きました。しかし貴殿の国の登山家と仲良くなれたことを嬉しく思っています。

幸いにも目標の山に登ることが出来ましたが、これは日本隊が登つた山でしょうか。慶応の立派な地図をお送り下さい。（注・送付済）（吉沢宛）

屋久杉の保護決まる

村井 米子

昨年八月の会報に、私は「屋久杉を守れ」と危機を伝えたが、その後地元鹿兒島や屋久島在住の山岳愛好者より署名も届き、東京でもルーム来訪者等の署名運動がなされるなど、各方面の協力を得た。

かつ日本自然保護協会その他も動き、マスコミも屋久杉の貴重さを特集するに至り、議員質問に屋久杉保護が出るようになった。

屋久島は昭和三十九年から国立公園に編入されている。所管の厚生省でも斎藤厚生大臣（当時）自ら屋久島に渡り、屋久杉視察を決定した。

与論の盛り上りは、かくて屋久島の八一%を占める国有林を所管し、伐採を進めてきた林野庁當局も無視できなくなった。昨年数回にわたり調査団を派遣し、その報告をもとに屋久島の厚生林保護計画を追加設定するに至った。

去る四十五年三月二十八日、中央審議会（会長三浦辰雄氏）で承認決定した計画は次の通りで、われわれの希望の、七、八割が達成したことになり、まことに幸いであった。

一、花山学術参考保護林 680 ha
屋久林班16（一部）17、20、24（一部）

二、荒川ヤクスギ観賞林 150 ha
下屋久林班80、85、86
屋久杉蓄積 1.5万m³

三、国制岳学術参考保護林 450 ha
下屋久林班2、3、4、暖帯亜熱帯移行林

別に上屋久、楠川小杉谷間の白谷地区13、14、15林班は施業上景観保護に変更（つまり伐採せぬこと）

また、その他の地域も伐採箇所分散、伐区面積縮小等、きめ細かな施業を行ない、施業を必要最少限にとどめる。

これは林野庁としてはかなりの譲歩で、正しい国民大衆の声の通った嬉しい例になった。

より完全な保護のためには、なお花山地区二一林班をはじめ数カ所、次の機会に保護林の指定を希望せねばならぬ。

厚生省も、今後更に調査を行ない、その結果によっては現在の特別保護地区の拡張が検討されることになる。文部省の文化財保護法による特別天然記念物の指定も拡大されることが望ましい。

十年あまり前、横有恒氏等と登った小杉谷から花江河への山腹一帯、すつかり伐られたと聞いて憤った私も、楠川小杉谷間の白谷地区、縄文杉やウィルソン株にやや近くの見事な屋久杉林が、施業変更とまわりくどい表現だが、伐らぬことになったというのは、まあまあと胸を撫で下ろした。

ただし、荒川ヤクスギ観賞林というのは若木で、決して三千年の老樹ではないが、安房港に近く、見学し易いため保護計画である。

以上、保護計画の決まった御報告をして、皆さんと共に欣喜たい、やはり今後注目しつづねばなるまい。樹命三千年を超える杉の巨樹林は、日本特有の世界的至宝である。昨夏ロンドンで逢った英人から、屋久杉を伐つておそうだね、と言われて私は赤面した。文化の後進性を衝かれた心地で……。

もう一本も伐らぬよう、冀う。

第十三回有志閑談会

第十三回有志閑談会は六月二十日午

後四時半から駒込六義園の心泉亭で開かれた。例年お見えになる田部重治名誉会員はことし欠席されたが、日高、藤島、神谷、岩永氏らを囲んでなごやかな会合であった。ちょうどこの日エ

ベレスト隊本隊の帰国とちがったため、松方、三田氏ら関係者が欠席されたのは少々さびしかった。出席希望者は年々増加しているが、何分にも会場の定員が二十五名というのではどうしようもなく、世話人として頭を痛めた。しかし小人数であるからこそ閑談会の意義があるのだ、このへんのかねあいはたいへんむずかしい。

◇欠席された諸氏からの短信
・横有恒 御案内賜わり御芳志のほどまことにありがたく厚く御礼申し上げます。愚生少々健康を害し、引籠っておりますので残念ながら失礼いたします。
・今井喜美子 門弟の長頭のおさらいとかち合いました。残念ながら出席出来ません。皆々さまによろしく。
・佐藤隆太郎 病中残念ながら欠席させていただきました。大正、昭和の初期前事務所のありました当時は晩翠軒で高頭会長、英木画伯のお世話で集会者三十名内外。昔になつかしい閑談会だけは是非出て皆様の怪気煽を拝聴いたしたいのですが歩行困難、甚だ残念至極。

・中河与一 六月十四日台湾に参りますので残念ながら欠席いたします。
・永原輝雄 出席を楽しみにしておりましたところ、当分ある事情にて家を離れ不在となりますので当日は欠席いたします。かねて用意しておりました絵がき三十枚同封いたしますから出席の皆さまに差し上げて下さい。
・冠松次郎 病氣中につき残念ながら欠席いたします。
・武田久吉 御招待深謝、しかし毎日突発の用事があり、本日も意外な来客

好評発売中

日本山嶽志

複製版

《付録Ⅱ 越後の旦那様》

高頭式編集・日本山岳会複製協力

キク判 本冊 一四〇〇頁 定価 四八〇〇円

付録 三〇〇頁

山岳各記（全国二一九四山）

登山術

山岳諸説

地質構造概論

山岳噴火年表

山岳表

主要山岳地図（四色）

主要山岳写真

各種索引

日本山岳界のバイブル

こゝに再現成る！

登山家や旅行者のために名勝旧跡は勿論、山勢・位置・周囲・登路・標高・里程・眺望・溪流・滝・宿泊所や飲用水の有無から樹林草木の様子、更に文章詩歌俳句・伝説・絵や写真を入れ、専門家には動植物・気象・地質に至るまで詳述。

◇日本山岳会の生みの親である新潟県長岡の高頭翁が、全財産を投げ打って明治39年に発行した本書は、山のバイブルとして、今なお多くの人々に愛読されている。

◇原本の少ない現在、その複製版の発行が望まれていたが、要望に応じて、日本山岳会と野島出版は、この名著を全く同じに複製した。

◇著者の「人となり」や業績、著書の価値や意義について、あらゆる角度から浮き彫りにした付録の「越後の旦那様」は、日本山岳会の会員各位により執筆編集されたもの。

★全国有名書店又は直接弊社へご注文下さい★

株式 野島出版

新潟県三条市一ノ木戸一九四七

【電話】三条（〇二五六三）③〇五二（代）
【振替口座】新潟 三四番

のため午前中つぶれてしまいました。六月二十日の会はまず見込み薄と申す次第につき欠席と御承知下さい。

・田部重治 神経痛のため四月初めから学校も欠席しています。残念至極です。

・鳥山徳成 残念ながら神経痛のため歩行困難欠席いたします。お集りの方によろしく。

次回世話人は中屋健一、伊倉剛三、齋藤桂の三氏にお願いすることになった。なお欠席された伊宮炳、渡辺兵力両氏から会費をいただいた。(山崎)▽出席者 足立源一郎、網倉志朗、麻生武治、今井雄二、岩永信雄、織内信彦、小原勝郎、小原晴子、神谷恭、川森左智子、桜井信雄、齋藤桂、島田一、関根吉郎、潮名貞利、鶴岡元之助、名須川浩、名見耶達男、中屋健一、沼倉寛二郎、日高信六郎、古沢肇、藤島敏男、堀田弥一、牧野衛、諸岡次、村井米子、松本善一、松本熊次郎、山下一夫、山崎安治、渡辺公平、吉阪隆正、若林祐治郎、伊倉剛三。

第24回ウェストン祭

坂倉登喜子

北アルプスの山開きを兼ねて、今年も例年通り、六月の第一日曜日の去る六月七日、上高地梓河畔において、千人近い参会者を迎え、盛大に碑前祭が行われた。

今年は梅雨期前に折悪しく、道路工事が始まり、中ノ湯から約四十分間徒歩連絡という悪条件にもかかわらず、幸にも好天に恵まれ、去年よりも参加者が多いように見受けられた。

東京からは沼倉氏が代表として出席、石原憲治、網倉志朗氏および毎年連続御出席の尾崎喜八先生、岡本精一氏等がお元気に参会された。エーデルワイス・クラブからは碑前でコーラス

をするため、平野先生の指揮のもとに、三十七名が参加した。

「新緑の徳本峠越え」

ウェストン祭の前日、六月六日の早朝徳本峠の記念山行に参加するため島々宿の登山口に六時頃から集合した。昔ウェストン師が徳本峠を越えて、北アルプスへ入山された当時をしのぶため毎年この峠越えのルートを歩くことになっているが、一度は越えて見たものと、エーデルワイス・クラブからは女性ばかり二十二名が参加した。毎年のことながら、このような記念山行に東京から、男性の参加者が少なく、殆んどが信濃支部会員、その他の方々でこんな素晴らしい新緑の島と谷の峠歩きなのに……と、いつも思うことなのだが、もともと全国の支部から大勢参加して懇親山行ができた意義があると思われた。

島々宿構内で受付を済ませ、安曇村婦人会の方々のお茶の接待を受け朝食をとり、午前七時過ぎ峠を目指し八十余名が出発した。

いつもながら岩魚止めの小屋前で昼食、うどんなど山菜の煮物を御馳走になりいよいよ島と谷を遡って、最後の登りとなった。

ジグザクの峠への急な登りは夜行の寝不足もあって多少疲れ気味な人もいたが、ようやくの思いで登りついて仰く穂高の麗峰に、疲れも忘れる感激だった。

登りついて約十分して急に雨が降り出し、穂高は雨雲の中に消えたのは全く残念、しかし翌朝快晴の青空に残雪を輝かせた穂高の姿が、迫るよにくつきりと仰げたことは、本当に幸いであつた。

今年は例年より季節がおくれているせいか、小梨の花は紅色のつぼみを固くつけて、おそ霜の冷たさにふるえていたが、陽あたりの良い川辺の大きな

けしゅうやなぎの梢からは、ふわりふわりと羽毛が舞い散って、六月の上高地の佳きを存分に表現していた。

峠からの下りは多少残雪があつたが心配するほどでもなく全員無事に上高地へ着いて、白樺荘の新しい室に落着き、夜は後発の平野先生方を迎えて徳本峠の感想など聞いて、懇談会を開いた。

「快晴のウェストン祭」

「晴れた……空が真青よ……」の声に、耳をすますと、小鳥の交響楽が窓から流れ込む。

自動車の入らない今年の上高地は昔の静けさに戻って、中ノ湯以奥は道路工事用の車だけで、上高地立入り禁止の実現を見たような感じがあつた。

碑前祭はバスの徒歩連絡で、参列者のおくれを予想して、午前十一時から開始、一時間前より練習したコーラス隊の歌が盛上りを見せるころ続々と参会者がつめかけ碑前は人で埋まった。

「飲むの歌」につれて開会され、「山の花」の歌とともに、安曇村小学生の献花があり、塚本信濃支部長の挨拶に続いて来会者の祝辞等の後、沼倉氏が「エベレスト登頂も成功したので、今度は日本山岳会の山荘再建に主力をそそぎたいから御協力願いたい」と挨拶された。

最後に「また今年も生き永らえて、北アルプスの山やまとの対面は涙ぐましい感激である……」との尾崎喜八先生の詩の朗読があつた。

「別れの歌」を最後に十一時半快晴の空の下に、碑前祭は盛会裡に終了した。時間の都合で碑前祭の後にはいつも行われる講演会が、今年は開始が一時間おくれたので、午後一時から、新装改築された厚生省の会場で行われた。何時もながら信濃支部の皆様が努力と奉仕によって、ウェストン祭が年

々盛大に行なわれ、地方支部の行事としては最も意義あるものと感謝する次第である。昔は日本山岳会本部が主催で、支部が協力していたものが、支部主権となつてから、本部の協力は年毎に減少し、本部からの出席者も今年はエベレスト行事多忙のためか、二、三人という状態で沼倉、網倉両氏と五千尺ロッジ前でバツタリお目にかかり、エベレスト登頂も済んだので、今度はウェストン祭にもっと協力するべきではないか、山荘再建の寄付も始まるだろうが、会員のために、プラスになるような行事をしてこそ、会のために寄付をする気持になるのではあるまいか、昔のウェストン祭は、碑前祭終了後、三、五、五穂高へ、槍へ、西穂へ、そしてまた自然研究班は植物や小鳥の声を訪れる山行などあって本当に楽しかったなどと、三人が共ども昔を想い出し、男性コーラスと合同でなと、話し合い再会を約した。

会員通信

南部の低い山二つ

古沢肇

姫神岳

去る四月二十八日、南部の名山姫神岳へ好摩口から登りました。七合目から残雪があり、くもり空で遠見がきかず寒い一日でした。頂上(一二三三角点、一二四・五m)には巨岩がいろいろとして、山名のやさしさに似つかめし感じの山でした。

下りには道を間違えて渡民口へと下りてしまい、開拓の人たちに笑われました。小学校の遠足でもよく道をまちがえるそうで、なかには泣き出す子どももいるそうです。私は泣きませんでした。

探行録

秘境白頭山天池

豪華限定版 ¥3000

白頭山探究登山隊々長 城山正三

アジア大陸東方民俗。北方系日本民族の故郷。女真族の聖地。大陸治政のキポイント。そして巨大資源と自然科学の宝庫として千古の謎を秘める白頭山。その頂上に鎮まる大カルデラ湖天池の神秘。科学者を中心とした154名の隊員による自然科学的総合探究の記録と、80数枚の写真に、歴史的地理的解説を加えた再び得がたい貴重な文献。登山家探険家をはじめ朝鮮中国、動植物、地理歴史、政治経済研究者に必読。

叢文社

東京都千代田区西神田1の4 電話 294-3959

玉山村洪氏には啄木を記念して立派な記念館がつくられています。姫神岳を背にして落葉松林の中に立っています。

余計なことなのですが「石川啄木は姫神岳に登ったことがあるでしょう」と記念館の人に聞きましたら、係の人は、さあ？と首をかしげ、「たぶん少年のころに登ったことはあるでしょうな」とあいまいな返事でした。啄木の「洪氏日記」にも姫神登山の記事はありません。

啄木は北上川沿いの故郷の風景を、「思ひ出の山、思ひ出の川」と歌っていますが、姫神や岩手山に登ってみただけの余分なエネルギーは持ち合わせていなかったかもしれません。

南昌山

盛岡市の南西郊に南昌山（なんしやうざん）という低い山（八四八m）があります。字面だけを見ると中国の地名のようですが、山名の由来を調べたら、徳川時代、南部侯の隆昌を折ってつけた名まえだということがわかりました。その以前は「徳ヶ森」といったそうです。修験道とも関係があるらしく、この地方で古くから知られた山のようです。

谷文晁の日本名山図会にも出ていますが、文晁は南面的な特徴のあるこの山の姿をよく写しています。鐘状火山で、主峯は釣鐘を伏せたように急峻な形をしています。

五月一日、五月晴の上天気に、東北本線の矢巾駅からこの山に登りました。山麓までタクシーで行き、山道にかりかますと、ようやく雪の消えたばかりの谷間には、コブシの花が美しく咲いています。雪石へと越す峠の上から頂上へかけての登りは急で、カタクリの花がたくさん咲いていました。

山頂にはわずかの残雪があり、石の古い獅子頭や、簡単なベンチなどもある

りました。すばらしい展望でした。いまこの山もふもとに温泉がわき、ヘルスセンターができて、急速に開けはじめています。山頂のひっそりとした静けさも、あとしばらくのように思われました。

ニューヨークとロンドンで

望月達夫

一カ月余りで十ヶ国をまわり、しかもニューヨークとロンドンでは、相当徹底した仕事上の調査をやるという団体オシキセ旅行だから、予定がビッシリつまっている、とても私事の余暇などないことは最初から判っていたが、ACとAACぐらいは何んとか訪ねてみたいと思って出かけた。

ニューヨークには一橋山岳部の同窓Mが永住しているの、彼に連絡をとっておいだったので、私が向うへ着いた時は、六月三日（水）に会員の会合があり、先年のアメリカ隊のエ峰登頂の映画をやるからその時来てどうかと話を。その日Mと共に午後六時AACのルームを訪ねるとセクレタリーのマッキー嬢が迎えてくれ、居合わせた長老H・S・ホール翁に紹介され、彼の口からマカールの日本隊が成功したニュースを知った。

早速ホール氏、マッキー嬢、それにR・ラタディ氏、A・F・デラゴ氏らに連れられてフランス料理の御馳走になった。ホール氏は昔、日本を訪れた際富士や浅間に登ったとい、模範さんにくれぐれもよろしくとのこと。八十をとうに過ぎているが十数年前まではカナダやアラスカで相当の難物をこなしていたというだけあって、ガッシリした体つきの老人だった。

エ峰西尾根の映画はNGSの作でどちらかというと一般向きのもの。来会者も若い人が多かった。会場で幹事の

マッカーシ氏に会い、日本山岳会は一シーズンにエベレスト、マカールの二つの八千m峰に登って、大した実力だとお祝いをいわれた。

この日はおそくなって、ルームに接続していたミウゼアムを見る時間がなかったでマッキー嬢は是非もう一度来なさいというので、ニューヨークをたつ五日（金）の午前中相当時間をやりくりして、またAACを訪れた。

M嬢に一昨日のお礼をいい、出て間もないAAJ（一九七〇年）を求め、すぐ隣接のミウゼアムを見せて貰った。ワークマンのビッケルとかJ・P・ファラーの写真等が目につく。余り時間がないので一時間位で別れた。

ロンドンでは宿舎のグロウヴナー・ハウスから目と鼻の先にサウス・オードリイ・ストリートがあったので、着いた翌日の六月十二日夕刻訪ねてみると、老婦人が一人で、丁度帰りかけている処だったが、遠来の客のため三十分ばかり帰りを延してなかを見てくれた。

事務室のマントル・ピースの上にはマナスル頂上の石が、エベレスト、ラカボシ、ムズターグ・タワ、アララットの頂上の石等と共に並べられてあった。またマロリーのエベレストでの最後の手紙が額に入れて飾ってあった。廊下には歴代会長の写真が最近のシブトンまでずらりかかげられてあったのは興味ぶかかった。図書室は、その日は遅いからあけられないというので、やむなく翌十三日（土）午前十時に再びたずねて見せてもらった。

「山岳」などAACと同様立派に製本された完備していたのが嬉しかった。AAJの編集者A・ブラックショー氏に老婦人が電話をしてくれたので、電話で同氏と話したが、こちらが片言だからよく意が通じただろうか、吉沢一郎氏に呉々も宜敷くといっていた。

その足ですぐ車を飛ばしRGSまで行ったが丁度土曜日で、今日は休みだからなかなか見せられぬという話。仕方なく入り口につづく広間とマップルームのぞき、入口にかかげられたゴールド・メダリストの名などを眺め、訪問録に記帳して、帰りはハイド・パークを横切つてスタスタ歩いて帰ってきた。

あとワシントンにはクリンチ氏がいるからといわれたり、ボストンには多分ウオシバーン氏がいることは知っていたが、時間が無い上に、その両所ではミウゼアムで若干の時間を使うあてもあって果たせなかった。

その後はチューリヒからルツェルン、ブリエンツを経てグリンデルワルトへバスで行く機会があった。これも団体旅行で時間が充分でなかったが、たった一晩泊った翌日の早朝、ただ一人で村道を歩いていると、藤島さんの写真で見覚えの教会がすぐ判り、何気なく墓地に足を入れると田口一郎氏のお墓がすぐ目についた。ここにはたしか、クリリー翁やアルマー一家の墓もあるのではないかと思つたが、時間が無いのでさすが余裕もなく村道をドンドン上手の方へ登って、もう人家がなくなり、アルプの彼方にウエッターホルンの垂壁が目の前になる処まで行って、時計を見たら時間がないことに気づき、大いそぎで引返してきた。

アイガーの頂上の雪に丁度朝日がキラキラ輝いているところだった。グリンデルワルトは晴れていたが、電車で登ったユングフラウ・ヨッホは濃いつがに包まれ、期待した展望もダメだったが、帰路はクライネ・シャイディックからウェンゲン、ラウターブルンネンと下って、例の有名な滝をはるかに眺め、インターラーケンから今度は汽車でベルンへ出た。

その後行ったアムステルダムでもブリュッセルでも、向うの山岳会の住所は一応ひかえて行ったが、とうとう時間がなくて訪ねる機会もなかったが、旅の最後にやってきたパリでは一寸意外なことにくわした。

私達が仕事のことだ訪ねたパリの証券取引所で偶然ベルナル・ビエール氏と会ったことだ。彼は三年前前銀行証券調査団の団長として日本を訪れたことがあったそうだが、寡聞にして私はそのことを知らなかった。僅か三、四分の面談で、しかもこちらが片言では実のある話も出来なかったが、近藤等氏によろしくと、とくにいわれた。

明日一日パリにいて、明後日は東京へむけてたつことになる。団体オシキセ旅行は一定の枠からどうしても出にくい、まあ少しは勝手なことも出来たようだと、今筆をおくにあたっていささか慰めている。ロンドンで買ったシブトンのThat Untravelled Worldのつづきを読みながら今夜もねるとしよう。

（一九七〇年六月廿四日夜
パリ、ホテル・ドゥ・クリヨンにて）

アンナプルナIIIに登頂

宮崎英子

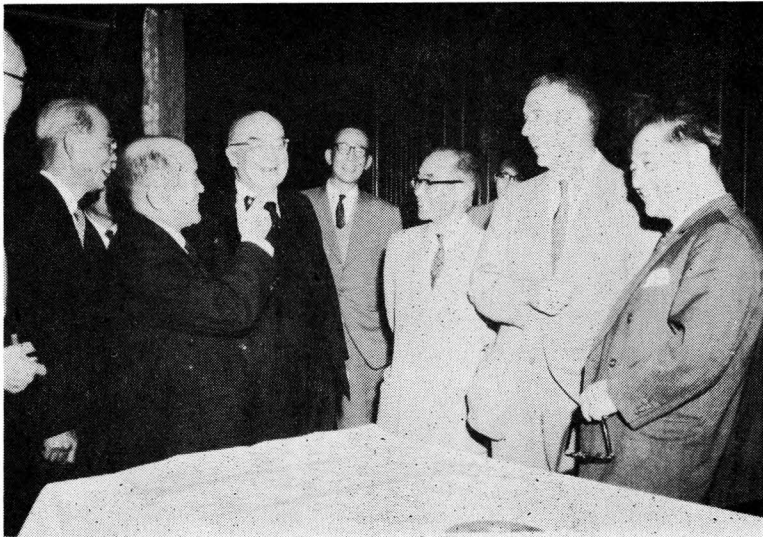
五月十九日頂上に立ちました。みんなよく頑張りました。「よかった！よかった！」って気持ちです。二十一日以来天候は悪く、モンズン前最後の晴れ間だったようです。私は一足先にB/Cに帰りました。C3からC2のクレバス地帯はみごとにズバズバになり、二時間下れるところを九時間かかりました。B/Cは緑です。わずか一カ月の間にすっかり変わっていました。きょう登頂ニュースを持ってメイランナーがボカラまで走ります。ではまた。（五月二十五日）

エベレストの
導火線……

オスカー・ハウストン

Oscar R. Houston (1883~1969)

吉沢一郎



チャリーリーの父、オスカー・ハウストンもいよいよこの世を去った。(二月一九日)享年八十六歳。アメリカ山岳会の元老であり、最も優れた会員の一人であった。

を終えてニュー・ヨークに立寄り、アメリカ山岳会のルームでその登山の話をして七、八〇人の前でやった時である。オスカーはその時私の肩をたたきながら、近く日本を家族中で訪れるから宜敷くと言っていた。

私が彼と初めて会ったのは一九六一年の九月、ペルーとボリビアの登山行

は彼らが来日した時、交野武一君の肝入りにより、三井本館で歓迎した時のものである。

さて、オスカーは(以下)AAJ, 1970, Robert H. Bates の書いた追憶記による)野外運動家、自然保護論者、有名な釣の達人であったが、本当の登山は、海軍法律家として国際的にも令名の高くなっていた中年になってからはじめたのである。

この前に彼は既に、自分の生れたオハイオ州のローガンを離れ、コロンビア大学を最優秀生として卒業し、同大学の「法律評論」の編集者となった。その法律事務所で長く続けられていたのであるが、彼はそこで、タイタニック、ルシタニア、モロ・カッスル、ノーマンディ及びアンドリア・ドリア等の巨船の海難事件において貨物関係の主任顧問をやった。彼は又、米国海事法協会と国際法律協会の会長の位置におり、その他長い間、アディロンダック連盟クラブの統帥でもあった。

一九二一年に Nelly S. MacDonald と結婚し子供が三人、長女がバーバラ、次女がジャネット、末の子がわかれのよく知っているチャールズ・ハウストンであり、その登山歴は世界的に有名である。

父と子は共に山を愛し、多くの登山隊が、ロングアイランドのグレート・ネックにあったその温情溢れる家から提案され、まとめられ、そして送り出された。

オスカーはアメリカの登山全体にいろいろの角度から貢献している。彼は若い登山家を励まし、発展につくし、援助した。そして一九三四年には息子のチャリーと共に登山隊を組織し、マッキンリー山塊のフョーリーカー(五三〇三m)の初登攀をした。又、一九三七年にはアラスカ山脈の Hayes (四

一七五m、これの初登は一九四一年のウォッシュバーン隊によって行なわれた)へ遠征した。

しかし登山家にとってもっと重要なのは、彼こそがエベレスト登頂を可能にするのに一役買った導火線であったといふことである。

即ち一九五〇年、彼が六八歳の時、登山家をネパールのいれない政治的障害を打破り(チャリーリーさえ、どうやってそれをやったのかは知らないらしい)、その息子、H. W. テイルマン、アンダーソン・ベイクウエル及びエリザベス・コウル夫人を伴い、タンポチェの廟まで入りこんだ。

チャリーとテイルマンはその一日あとに、クンブ氷瀑の見えるところまで進み、後にエベレストに登られる唯一のルートになる要めを発見したのである。

オスカー・ハウストンの想像力と知謀が、クンブ・ルートの開明に寄与したことは瞭らかである。彼はかくして齢い六八歳にして登山の世界を変えたのであった。

その生涯の終りにおいてあのように謙虚でなかつたならば、この尊敬すべきわれわれの山岳会の仲間には「ユリッサイズ」からの引用には値いしなかつたかも知れない。

私は多くのものを見たり知ったりした。一人の住む町、そして風習、氣候、議会、政府、私自身をもだが——しかし私はそれら総てのものから敬まわれた。(終り)



奇 遇 //

去る三月中旬、カナダのバンクーバーにいるマックス・カットクリップという人から手紙が来た。タズメニアにいるブラットから貴名を教えられたが今度、アサヒペンタックスの世界写真コンクールで一等になり日本に招待されることになった。ついては出来たらいいのだが、カメラ屋の日程より少し早く行くので手頃なホテルの予約を頼みたい、と書いてあった。

ホテルはどのやうらとれた。手紙の往復二、三回。羽田に迎いに行つてやると喜んで待っていた。モノ・レールと国電でホテルへ。翌日はカメラ屋を二軒案内、ズームその他の買入れ手伝い。それから北海道へ彼は行った。南極大陸へ行った時にあった人(JAC 会員)を訪れるため。皆よく面倒を見て下さったらしい。

帰京後、アサヒの方の日程で動き日本を満喫(万博では人混みにびびり)した。離日の時には行き違いで会えなかったが長い手紙を置いていった。カナダでもタズメニアでも来たら恩返しをしたいという。

彼のホテルで私の例の「判取帳」を出したら「あれ、これは見たことがあるし、私の名前も書いてある筈だ」と言った。成るほどバンクーバーでカナダ山岳会の小集会があった時、二、三人の人に署名してもらった中の一人であったのだ。そしてみるとるつきり赤の他人ではなかったのだ。

彼は一九三〇年生れだから四〇歳、一〇月には又南極へ行くと言っていた。世界中の山をよく歩いている好青年だ。手紙を書くの大変だし、いろいろなことを時間も潰れるが、こういう良い山友達が鼠算式に増えていくのも又楽しみなのである。

(吉沢)

行方沼東さん逝く

小野 幸

あなあはレシダに水やるその他に用なくなりし行方沼東

この歌は行方沼東会員の晩年の短歌である。行方さんは明治二十九年十月十日、千葉県の成田に生まれ、若くして志願兵となつて横須賀海兵団にはいり、軍艦生駒や朝日に勤務したり、サイパン島の守備隊になったりした。除隊して成田の自動車会社につとめた。戦時中は町会議員や青年団の顧問をしたり、戦後は教育長などをつとめたが、その後は野にあって一市民として、昭和四十五年三月二十六日、その生涯を終わられたのである。行年七十三歳。

趣味は植物採集、洋画、登山、和歌その他多くのものに取りこんでいたが、和歌では戦前「金鈴」という同人誌を十号近くもつづけて出したり、植物の方では昭和二十七年に日本シダの会をつくり、なかならるるまでに会報は九十七号を数えていたものである。この稿の最初にかかげた和歌は行方さん、昭和四十一年の作なのである。

さて、山登りの方は横須賀の海兵団時代、横須賀市内の書店で田部重治名誉会員（旧、南日）の『日本アルプスと秩父巡礼』を求め、その記事に動かされて、早速その夏八月休暇を利用して、友人山田氏をともない八ヶ岳に登山したのである。時に大正八年、山へのスタートの年であらう。

その後間もなく、海兵団除隊後は田部名誉会員とも近づきを得、山の話をききつづ、毎夏一回つづ、北アルプスを足を押したのである。燕岳から槍ヶ岳、上高地。針の木越えの薬師岳。後立山縦走等。

その後、松井幹雄さんたちの「霧の

旅」会誌を見てからは急に低山に向うようになって、それと同時に植物採集、とくにシダの研究に向かつて行かれるのである。

わたしも行方さんと同じ成田にすんでおり、戦前に山に登る人といえばこのあたりでは、まったくすくなかった。昭和二年の春、同志と山岳部をつくらうとしたとき初めて相談にうかがった。その頃の中学校は五年制であったので、三年生から五年生の連中によびかけて夏休みに日本アルプスや尾瀬行きをさそった。その参加者が仲間となって溪谷会という山登りの会をつくり、昭和四年にはその第一号にも「尾根を伝ふ」と別に短歌も寄稿していた。

山へ行方さんと同行したのを戦前は二度ほどおぼえていて、一度はある年の正月元日千葉県の鹿野山から三石山にぬけた。この時は何とかというシダがあるからと、さそわれたが、こちらはシダはチンブンカンブンで、歩く方のお供だけならと愚妻と二人で参加した。その日は寒く、佐貫駅からウネウネした道路をトボトボと鹿野山に登った。門前の旅館に泊ったが、翌朝の九十九谷に朝霧のかかった景色は今も印象に残っている。

そのつぎの山行きは阿武隈の猫鳴山であった。お正月に雪をふみに行こうというのであった。この行については日本山岳会の会報にのせられていた。わたしの参加したことは記されていないが、なつかしく思い出される旅であった。この時は真冬でもあり、植物のことはあまり気にされていなかったようにおぼえていて、これも一泊旅行で、わたくしと二人だけの山登りであった。

行方沼東の沼東（しょうとう）は号

で、印旛沼の東方にすんでいるので、このような号をつけたのであらう。本名は富太郎であった。日本山岳会へは昭和七年に入つて、会員番号は一三八九番、田部、小島の紹介になっている。勿論、田部重治、小島島水両会員であらう。

会報にはよく寄稿されていた。その主なものをはひろつてみよう。

八溝山より高笹山へ
太滝根より万太郎へ
南洋委任統治諸島の山々
ウェストンと同時代の一人登山

「利根川図志」の著者赤松宗旦
義知のこと
三石山と羊歯
清澄の裏山路
羽越、荒川峡と鷹の集温泉
猫鳴山と吃鬼屋山
栃木欽泉と五社山
蓬田山
呼石・和尚山・湯岐

なお、戦後は会報への寄稿はほとんど見られないようであるが、主な山登りをあげよう。昭和二十五年、古賀志山。二十六年、安房高塚山、三石山、南伊豆、清澄山。二十七年、奥武蔵。二十九年、信濃豊田山、乾徳山、上州黒澤山。三十年、遠州戸中山、会津駒ケ岳、尾瀬、遠山北又沢。三十三年、下野石裂山。三十四年、朴の川山、五台山、段戸の裏山。三十四年、吾国山、紫尾山、甬志志岳。三十六年、野間岳、磯間山などなのである。

著書はふたつを数えることができる。

シダの採集と培養 B6
昭三六・一一・一五 加島書店
昭三六・一一・一五 加島書店

しだ帯（歌集）昭四一・一〇・一〇（東京）
日本シダの会（成田）

（付記）この稿を草するにあたって、

行方さんの友人山田清吉氏に負うところもありました。記して感謝の意を表します。（四五・四・二八）

今西錦司博士飯豊に登る

（越後支部）市村 貞夫

マナスの第一次偵察隊長の岐阜大が長が日本山岳会越後支部長藤島玄氏の招きで高木崎男（大垣H.K.海外登山隊副隊長）（京大科学研究所）終氏を伴つてひこり飯豊に姿を見せた。藤島支部長の連絡で支部会員を集めて飯豊（駒形山）まで御出迎に行き、大山コースは五枚沢コースを下り、五枚沢車落で一泊された。われわれ会津岳人にとっては日本山岳会の長老を歓迎したのは藤島玄氏とこの回で二度目。今西博士は縦走の後「飯豊山には以前から一度登りたいと思っていたが念願がかなって満足している、飯豊山は実に大きな山岳で目を見張る景色が多い」と感想をのべられた。

また「山小屋を清潔にし、草花などの自然保護に心を使って欲しい」とわれわれ会津の山仲間には教訓を述べられた。山を下りた晩は夜が明けるまで、「万歳の式」をやり通した。

行程は、
六月六日 東赤谷・湯の平
六月七日 オーイン尾根を経て中岳、北股岳、御西岳
六月八日 御西岳、本山・三國岳、地蔵山、牛ガ岩、五枚沢

参加者 今西錦司、藤島玄、高木崎男、鈴木敏男、渡部重吉、市村貞夫、豊島洋一、灰田目昇、五十嵐克、終氏、秋葉幸一、大堀新治、井上清志、小椋光則、渡部啓介。

プータンから帰国
小方 全弘

このたびの私のプータン旅行につきましては、数々の御高配をたまわり、まことに有難うございました。おかげで六月二十六日、無事帰国いたしました。

今回の旅行も、ひとり旅でしたが、一九六八年の経験がすいぶん役に立ちました。成功だったと思います。昨秋発表した「プータン素描」（芙蓉書房）の誤りも何らかの形で発表いたしますので、しばらくの間、ご猶予をたまわりたく存じます。とくにわづか一九六八年の間のプータンの発展ぶりには驚嘆いたしました。そしてナイーブな心情におのれ自身を深く反省した次第です。

今回は健康にも恵まれ、とくに長期にわたって、プータン人の家に住まわせてもらいましたので、彼らの生活の一端も観察することができました。天候には恵まれず、写真と山はダメでしたが、私なりに努力してきました。とりあえず帰国のご報告申し上げます。（六月三十日）

山岳第六十四年発行
山岳第六十四年が発行されました。「グリーンランド水床の横断」など充実した内容です。四十四年度会費未納の方にはお送りしませんので、至急会費をお納め下さい。

エベレスト・グラフ特装本発売
エベレスト・グラフ特装本が出来ました。全隊員サイン入り。付録にエベレスト特大エバガキが付いています。頒価千円（送料百五十円）です。まことに美しいグラフです。至急料金をそ

えルームへお申し込み下さい。

「山岳」

編集覚書

望月達夫

約二十年間も「山岳」の編集にたずさわったということは、われながらびっくりしているが、近く交代者にひきつぐというからには書き残しておいただろうかとよく言われる。併し、ざ改まって書くとなると甚だむづかしいし、同時に多忙に紛れて億劫でもある。そこで思いついたことを一〇二〇〇書いてみよう。

私の経験からいうと「山岳」の校正をする場合は、校閲とか校訂とかいう仕事で、どうしても避けられないことである。従って将来校訂だけを専門家にまかせるにしても、編集者が原稿を熟読して校訂をするなり、校正刷になった段階でも一、二度は熟読すべし、ということである。

事例を述べよう。つい最近の例だが、目下校正中の六十四年号に載るY君の原稿中にパンザール・ヒマラヤのパンザールという山のことが出てくる。もっとも同原稿のその所はK君が加筆訂正しているの、K君の原稿といつても嘘ではない。私は原稿では、それをしなかったが、校正にあたって引用されていくK・メイスン『ヒマラヤ』からの数字を念のために原典と照合してみた。これはなにも同訳書がたまたま田辺氏と私の共訳だからということではなく、原典が手許にある限りは、できるだけそうするのが私の習性だからである。字句に殆んど誤りがなかったのは流石にK君だと

感じしたが、しかしながら唯一つ重要な相異を発見して戸惑わざるを得なかった。それはパンザールの高度が(ただしメイスンの本には、まだ山名がないが)、メイスンの訳書では二、五七〇呎とあるのに、K君の原稿では二、七五〇呎となっていたことである。早速、訳者の書き間違いかと思つて、メイスンの原書を開いてみるとその方にも二、五七〇とある。これだけで済ましてしまったのだが、万一メイスンだと書き間違いがないことはあるまい。K君は、この付近のことをかなり調べている筈だし、従来書いたものにも誤りが少ないと思つたものだから、メイスンが使用した同書に引用の註記のある原資料H J第十四巻(一九四七年)所収のF. Kolb: Third Choice—Adventures in the Padar Region という文献を繙読してみると、それにも正しく二、五七〇とあってメイスンには間違いないことが判明した。改測されて当時と高度が多少変化した例もなきはないが、たまたまK君の原稿にはメートル表示の高度が併記されているので、その数字六五七五を労をいとわず換算してみると二、五七〇にごく近い数字を得た。これだけ材料がそろえば二、七五〇が誤りだということとは、もはや否定できない。

ただ校正だけをやっていたら短時間で済んでしまったものを、なまじ余けいなことをやっただお陰でとんだ時間を費したと思つたが、若しこれをやらなかったら、誤った高さが活字となつて、流布されたかも知れない。こういう誤りが実は一番困ることで「山岳」の記事は案外一般が信用するから、簡単なミスプリントより何倍か注意しなければならぬと、かねて抱懐していたことを改めて痛感した次第である。

実はこうしたことは今に始まったことではない。二十年もやっていれば、この種のことは話の種が尽きない位多い。比較的若い人の原稿に誤りが多いのだが、年輩者のある、著名な方の原稿にもたまにはある。人間には思い違い、記憶の誤り、かき誤りがどうしても避けられないからであらう。

それで思いつく印象深い話を一つしよう。武田久吉博士の原稿の中に、日光のオオマナコ、コマナコの山名の記載があり、それが大真子、小真子と書かれていた。現在一般には大真名子、小真名子とかくのだから、初めは書き誤りかと思つたが、武田さんはそもそも山名などを書きがちである方ではない、山岳会の中でも記憶が確かで、正確無比のきこえが特に高い方だから、正にここには処理はできない。恐る恐る電話をもつておうかがいをたてた。電話口へ出られた武田さんは二つ返事で「それに間違いない筈だが、念のため、日光山志にあててみよう」と言われ、おや長い時間がかかるのかと思つていると、僅か三、四分後に「日光山志には真子とあって、名は入っていないね、だからそのままではよしい」という御返事、そこで私は誤植と思われのことのないようルビを振られてほしいとお願ひし、快諾を得て、お礼をいって電話をおいた。流石に武田さんには間違いないし、記憶もはっきりしておられるし、且つ直ちに原典にあたる等、改めて尊敬を覚えた。

これは一例だが、こういうことで手紙をかき或いは電話をかけるなど、凡て時間も要し、手間のかかることは言うまでもない。併し編集者たるものは、労をいとわず、おしませこの種のことを積極的にやらなければいけないと思う。

私はかつてある先輩から「山岳」に誤植の少なくないの御指摘をうけ、

些かそれに反撥した記憶もある。その気持の内容は、前にも一寸述べたからここに贅言ない。尾根を屋根と誤るような単純な誤植は、みつともないことだから無きではないが、「山岳」のミスとしてはむしろ罪が軽い。重要なことは前記した二、五七〇が二、七五〇と誤記されるような誤りこそ防がねばなるまい。また執筆者も、山名、人名、標高等により精確度を強く要請されよう。

私が二十余年の編集担当中最も心をくだいたことは、いい原稿を得ることであり、内容に間違いなきを期することであつた。由緒ある会の機関誌として造本の点でもできるだけ品格のあるものにしたいと思つたのも事実だが、せんじつめれば右の二つが大きかつたと思う。充分になし得たなどとは、毫も思つておられないが、些かそういうことに寄与したかと自ら信じている。

図書紹介

山の素描 第一集

松崎 中正

長さが短くて幅が広く、ヘソのついたトップバンドの雄大なスキー——なつかしいクラシック・スタイルの山スキーを売っている店が札幌にある。山道具専門店秀岳荘が北海道の岳人たちに「君臨」しているさまは驚くべきほどで、今日の北海道の山登りは秀岳荘なくしてはあり得ないと言ってもよさそう。

「山の素描」はその店のPR誌である。A5版十二ページばかりのパンフ

レットが一年に三回送られてくる。

昭和三十三年の創刊当時、編集者の山口透氏は、「この北海道の山々に足跡を残された人たちの記録や随筆などになまじって集めておかないと、あとをいつた悔を、年ごと重ねつつあるのは残念だ。」と心がまえを語り、協力者の坂本直行氏は「多少山の絵を描いたり、文章を曲りなりにも書いていたりして、営業でない山の雑誌にしたいもの、営業でない山を中心にしてのものをこらえて、山を中心にして勝手な熟をもちあげることができたらさぞかし楽しいことだろうと思つたが、幸か不幸か、そのものズバリではないにしても、それに近い話を持ちこまれた……(中略)金井さんにしたところで……ソロバンが邪魔でとても読めたものじゃない——なんていう雑誌をつくる心配はないどころか、ひょっとすると雑誌のナダレの下敷になつて、遭難する危険の方が心配であるほど山の熱愛者であるところに、僕たちは喜びを感じる。『(中略)僕の欲がはいれば、将来北海道を中心とした、文学的な山の香り高い、そして登山者の教養を高める品格をそなえた『山の素描』をもちあげた雑誌に発展することを心からながう次第である」と書いている。

また発行者の秀岳荘主人金井五郎氏は「こればかりは、たとえ店がつぶれても尻切れトンボにはしたくない、と思う。岳人の書架に残るものにしたいた、ただそれだけである。」と述べているが、「発行に寄せて」と題して伊藤秀五郎氏は「本誌は刊行者、編集者、読者の息があつて、十年以上の長寿を祝う日のあることを望みたい。」と、いささか心配顔であつた。

ところが、「山の素描」は遭難もせずに無事続いて五年、金井氏は「新しい『素描』ができ上つてくると、私は

いつも胸をおどらせながら手にとって見る。こんなりっぱなものがうちの店から出せて、皆さんに喜んでもらえるということに大きなあわせを感じないわけにいかない。ただ、もっとページ数があつたらと思うけれど、景気よく始めてパツと消えてなくなるより、細く長くつづいたほうがいいからと自らを慰めている。ときどき、これまでのものをかきながら、まだ薄い。せめてこの倍の厚さになったら製本し、一冊の山の随筆集として、最初から読み返してみたいと楽しみにしている。」と感慨をもらしていたが、昭和四十四年遂に八年目に至つて通巻二十四冊二百九十二ページにわたる全部を第一集として一冊にまとめることが出来たのである。そして四十五年度からは第二集に向つて着実な歩みが続けようとしている。大いに声援をおくりたい。

さて第一集の内容であるが、巻頭の望月達夫氏の「北の山」(これはあとになって「遠い山近い山」におさめられた)をはじめ、加納一郎氏「霧深菴雑記」、深田久弥氏「チセスプリ」など、道産子である内地人であるを問はず、すべて心から北海道の山を愛する人たちの文が集められている。研究、随筆、記録、紀行などさまざまな分野にわたり、総勢百二人の北海道の山に関する楽しい文でいっぱいである。

主観的になるが、印象に残っている記事をあげてみる。向川信一「回想のオコタンへ湖の旅」はありし日のこの神秘的な湖への挽歌といえよう。周はじめ「草に消える道」は根釧原野の消えゆく悲しみを雲を飼う松木喜衛門老人の思い出とともに美しい筆で描く。早川禎治「クマネシリのこと」はいかに北海道の山である。低いのにこれだけの情熱の打ち込める山はもう内地

には少なくなってしまった。鎌田耕治「砂金のある故郷の山」は見事な短編小説。渡辺定元「エーデルワイス」は菅林署の専門家による北海道のウスエキノウの総決算である。しかしながら、折角なら、学名や種類などの相違点を簡単に示していただきたかった。

ひとつのついたこと。七十五ページに「忍路の兜岩には忍路草という珍しい草があの岩の裂目に根を下して繁茂している。この草は牧野植物図鑑にも載っており、ここにしかない草」といわれている。」とあるが、忍路草は確かに珍らしい草ではあるが、青森新潟の海岸にも産することが知られており、牧野図鑑(新版)にはパンシクルモンというアイヌ語で載っている。言い落しにならないことは、毎号載っている直行画伯の花のスケッチである。「素描」の題字を書いたり、秀岳荘の名づけ親になったりしている画伯のこの美しいカットは、二色刷で毎号工夫をこらした組み方の本文をいやが上にも引き立たせている。

合本になった第一集は瀟洒なグレーの表紙をつけれ、金井氏の念じたとく愛蔵するに値する立派なものとなったが、タイトル・ページと奥付のないことは画重点を欠く。類のない本であるだけに惜しいと思う。なお札幌から一つ一つのPR誌が私のところへ送られてきている。「紅」と題する味噌会社の随筆誌で、最近坂本画伯の「はるかなるヒマラヤ」という画文が連載されていることを付記しておく。

「山の素描」札幌市北十三条西四丁目秀岳荘発行
「紅」札幌市北三条東四丁目岩田藤造サービス・センター内紫紅会発行(付記)この稿を書き終ってから「山の素描」は創刊当時に望月達夫氏によ

図書室便り

昭45・6

図書受入報告

- 山と溪谷社寄贈
 - (1)「カラー立山、剣岳―黒部と白馬岳―」(カラーガイド34)昭和45
- 文部省登山研修所寄贈
 - (1)「登山指導者研修会テキスト」昭和45
- 二見書房寄贈
 - (1)本多勝一著「初めての山」昭和45
 - (1)和田匡弘氏寄贈
 - (1)和国弘著「アフリカ縦断―早大新開社 昭和45
 - (1)城山正三氏寄贈
- 城山正三氏寄贈
 - (1)城山正三著「秘境白頭山天池探行記」林 義文社 昭和45
- 林 義文社寄贈
 - (1)林義著「修学旅行の事例的研究」高松第一高等学校 昭和43
- 定期刊行物受入報告
 - (部報・会報)
 - (1)関西大学山岳会ヒマラヤ委員会「アソナルIV通信」No. 3
 - (2)広島山の会「山毛榉林」No. 162〜165 45-3-6
 - (3)福島県山岳連盟「福島山岳」No. 1 45-5
 - (4)兵庫県山岳連盟「兵庫山岳」No. 37 45-6
 - (5)北海道自然保護協会 会誌 No. 7 45-3
 - (6)日本山岳協会「国立公園」No. 247 45-6
 - (7)京都山岳会「京都山岳」No. 541 45-6
 - (8)「日本大学山岳部 会報」No. 20 1965〜68

- (6)「日本ネパール文化協会会報」No. 5 45-6
- (6)「日本山岳協会会報」No. 16 45-5
- (11)岡山大学山岳部部報 No. 13 45-3
- (12)多摩山岳会「O・M・C・レポート」No. 247, 248 45-6, 7
- (13)東京野歩路会「山嶺」No. 482 45-6
- (14)「札幌山の会年報」No. 2 45-5
- (15)日本自然保護協会「自然保護」No. 95 45-5
- (16)低山を歩く会「低山」Vol. 58〜60 45-4-6
- (17)「日本山岳会東海支部報」No. 9 45-5
- (18)横浜山岳会「山」No. 455, 456 45-5, 6
- (19)日本登山協会「山と雪」No. 146 45-6
- (雑誌)
 - (1)「フルプ」No. 148 1970-6
 - (2)「岳人」277, 別冊(70の夏山)
- (その他)
 - (1)「明大訪華親善登山学術探査隊計画書」70
 - (2)高松一高東アフリカ遠征準備委員会「東アフリカ踏査に関する計画書」『Journals Arrived in June 1970』
 - 1. "Alpinismus", 1970-1
 - 2. "Die Alpen", No. 5, Mai 1970.
 - 3. "Appalachia bulletin", Vol. 36 No. 6, May 1970.
 - 4. "Der Bergsteiger", Jahrgang 37, Heft 5, Mai 1970.
 - 5. "The Geographical Journal", Vol. 136, Part 1, March 1970.
 - 6. "La Montana", No. 13, December 1969.
 - 7. "Mountain", No. 9, May 1970.
 - 8. "The Mountain Club of South Africa", No. 71, 1968.

- 9. "The Nepalese Perspective", Vol. 6, No. 31, May 1970.
- 10. "Österreichischen Alpenvereins", Jahrgang 25, Heft 3/4, März/April 1970.
- 11. "Österreichische Alpenzeitung", Jahrgang 88, Folge 1370, März/April 1970.
- 12. "Rivista mensile", Anno 91, No. 4, Aprile 1970.
- 13. "Rivista mensile", Anno 91, No. 3-4, Marzo-Aprile 1970.
- 15. U.I.A.A. Bulletin, No. 39, 40, Avril-Mai 1970.
- 洋書受入報告
 - 山田圭一氏寄贈
 - (1)Matteo Sanuki, Keiichi Yamada『The Alps』(This Beautiful World Vol. II), London, Ward Look, 1970.
- (A・S) No. 13
 - 梅雨もあけたようである。今年の夏は寒そうだ。秋田山の知人がしきりに憤っている。入梅とは梅雨に入ること、梅雨そのものではない。東京の人は全く困る、と言うのである。私も東京人が全部そう言い方をすること、かどうかわからないが、時々聞くことがあってやはり妙である。「出梅」という勇ましいのがあって、まださびである。(東)

会務報告

七月理事評議員会

(一日午後六時半本会ルーム)
出席者 三田会長、吉沢、深田副会長、藤井、山崎、丹部、大森、中屋、野上、小倉、宮下、牧之内、神原、高永各理事、折井、渡辺(兵)、村山、高

山各評議員、小原監事、松方、松田エベレスト委員

▽議事

・成田隊員弔慰金の件 (藤井)
一応の目安を三百万円としエベレスト勘定から支出する。この件については委員会側の担当は松田委員が当る。

・第二次RCCの件 (山崎)
団体加盟申請と同時に推せん依頼があるが、入会の件は承認、推せんは吉沢副会長が代表者と話しあった結果をみて再検討する。なお遠征のため便宜的に入会する例が増えているがこの件についても会の態度を決めておきたい。

・日米合同の遠征計画の申請に日本山岳会後援名義使用の件 (松永)
本会に一切の迷惑のないことを条件として許可する。

・エベレスト隊使用済みの装備処理に関する件 (松田)
八月末に日本へ到着予定の持ち帰り装備は、管理その他の点を考慮して文部省登山研修所へ寄贈する。ただし本会で使用の場合許可されるよう要請する。また装備四セットはエベレスト展に使用後、三セツは秩父宮記念館に、一セツは本会で保管する。

・エベレスト国際登山隊の参加要請に関する件 (吉沢)
明年の国際隊が、隊員として南壁経験者の参加を希望しているが、自己負担金等の問題でむずかしい。本会とし個人的な参加希望者を斡旋する態度に止める。また同時に要請のあった毎日新聞社後援の問題は吉沢副会長と藤井理事が折衝してみる。

・新旧役員懇談会の件 (山崎)

七月末か八月初旬に開催したい。具体的な問題は丹部理事に一任する。

・エベレスト隊のシエルバ、同伴帰国に関する件 (小原)

理事会の意に反し同行したことは、松田委員の説明により連絡の行き違いであったことを了承する。

・イタリア山岳会々報の日本特集号の原稿依頼の件 (神原)

山崎理事に一任する。

・フランス隊ジャスー遠征隊の記録映画上映について (丹部)

フランス貿易センターから会員の希望があれば上映するむねの申し入れがあり、後日検討する。

・上高地山荘に関する件 (折井)
替地申請を本年中に行ない、来年度は具体的に改築工事に着手したいので、この計画に基いて山荘運営委員会を拡充する。今後山荘の充実を重点課題の一つとして進めたい。

・公式文書の保存について (折井)
野上理事の担当で確実な保存方法を研究し、常務理事会で善処する。

▽報告

・エベレスト隊帰国報告会の件 (松方)

・六月現地支部長会議の件 (山崎)

・婦人懇談会、並びに女子登山指導者研修会の件 (小倉)

・ヒラリー卿夫妻の訪日日程の件 (神原)

・韓国ソウル大山岳部OB会歓迎会の件 (神原)

・富士山頂医学研究所医師派遣の件 (大森)

婦人懇談会集会報告

六月二十七日(土)夕方から二十八日(日)の昼まで、隣家に住まれている川森さんのお世話で、世田ヶ谷区野毛にある東京都世田ヶ谷青年の家で開

かれた。

玉川、第三京浜を見下す高台にあり杉、松の林にかこまれた近代建築の建物で、ホール、会議室、芝生の庭中央にキャンブファイヤーの出来る囲いまであって設備が理想的といっても過言でない程いい、係の山口、関田さんの骨折で手作りの夕食を囲み、これからの登山抱負など語り合った。ヒマラヤ方面への希望が多い。少人数でワンデリングをしてみたいなど。

家庭をもっておられる子供のためにどうしても泊れない方や用事のある方は日帰りされたが、今後このような催しがあったら日帰りでも差し支えないからどしどし参加して頂きたい。

二日目は六時三十分起床、分担して掃除をし七時三十分、裸足になって芝生に出、ホールからのレコードに合わせてラヂオ体操をする。川森さんの案内で近くの善養寺の樹令七百数十年の特別天然記念物の榎の木を見に行く。

一部のものは等々力溪谷へ散歩に出る。梅雨の中休みで青空がのぞく。つめたい風が気持ちいい。閑談後中食して散会した。

▽参加者 今井、川森、小原、黒石、斎藤、小倉、川井、武田、山口、岸、芳野、関田、須田、及び学生部から初めて大瀬、安倍の二名が参加された。

(斎藤桂)

ルーム日誌 (45年6月)

3日(水) 理事評議員会

4日(木) 稲門山岳会幹事会

9日(火) 北大山の会懇談会

10日(水) 第二六〇回小集会・映画「グルジャヒマール登頂の記録」薬師義美氏

12日(金) 図書委員会

エベレスト委員会

13日(土) 日・ネ協会評議員会

学生部女子部例会

16日(火) エベレスト委員会

17日(水) 常務理事会

19日(金) 婦人懇談会

29日(月) 海外連絡委員会

エベレスト委員会

六月中来室者 三二五名

エベレスト委員会

エベレスト隊帰国歓迎会

本会エベレスト隊は六月二十六日午前、皇居に参内、天皇、皇后両陛下にエベレスト登頂の模様を報告したあと午後二時から東京紀尾井町、ホテル・ニューオータニでの歓迎会、午後六時半、NHKホールでの帰国報告会にのぞみ、登山隊を解団した。

歓迎会はホテル・ニューオータニの「芙蓉の間」で関係者約五百人が集まって開かれたが、それは先立ち隊員だけで故成田隊員の遺影に献花しその霊をなぐさめた。村山評議員、三田会長につづき秩父宮妃殿下が「長年の念願がかなってこの上ない喜びです」とあいさつされ、これにこたえ松方隊長は「妃殿下がこんなに喜ばれるなら一斗ダール一杯エベレストの石を持ち帰ればよかった」とユーモラスに報告した。

あとがき 名誉会員冠松次郎氏がお亡くなりになった。合掌。(山崎)

昭和四十五年八月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三二三 向井ビル

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部 (専門取扱営業所)
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話 (352) 1556・1557

☆会報製本御引受け☆

製本代 (251号~300号) 金700円也

送料 別受け 金120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2~15、電話(943)0311(代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731)7331(代表)
工場:大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

